古代から室町時代までの吾妻（久米）

（2021.12.3　久米の歴史を綴る会 松田福男）

◆地形　**武蔵野台地と狭山丘陵**

①武蔵野台地は、関東山地から流れ出た「古多摩川」の広大な扇状地（青梅あたりが扇央）といえる。

②狭山丘陵は、その扇状地の川と川の間に残された丘陵地帯の一つであり、武蔵野台地に緑の島のように浮かぶ丘陵である。

③柳瀬川は、関東山地から扇状地を流れ出る「古多摩川」の「名残り川」の一つ

④吾妻地区は、武蔵野台地の南端にある狭山丘陵の谷間にあたる場所で、そこを流れる柳瀬川の上流部にあたる地域である。

第１図　武蔵野扇状地の地形（角田清美原図）　「羽鳥謙三（2004）より」

■旧石器時代■　（約３５０００年～１３０００年前）

①旧石器時代は、木の実が採れる森、のどをうるおせる水場、シカやイノシシを追って移動する生活を送っていた時代で、竪穴住居、土器、弓矢は発見されていない。

②所沢市内からは２４か所の遺跡が発見されているが、最も古い三ヶ島の「お伊勢山遺跡」（約３万年前）からは石器が発見された。

③「砂川遺跡」で発見されたナイフ形石器（約２万年前）は、動物を捕獲するための槍の先端部分につけられたと考えられる。

■縄文時代■　（約１３０００～２５００年前）

①縄文時代は、竪穴住居やお墓のある集落で安定した定住生活をしていた時代。定住できるようになったのは、土器の発明によって様々な植物を保存したり、調理したのすることができるようになったり、弓矢・釣針の発明で獲物をとることが易しくなったためと考えられる。所沢市内の遺跡の半分以上が縄文時代のもので、ほとんどが５０００年～４０００年前のものである。この時期の土器には、人の顔、動物をはじめとして様々な文様が付けられているが、縄文人の自然に対する祈りの気持ちが表現されたと考えられている。（P1 遺跡分布図）

※「東村山郷土資料館」の展示「下宅部（しもやけべ）遺跡」（P2 写真）参照
↑縄文後期

■弥生時代■　（２５００年前～３世紀）

①大陸から九州へ米づくりが伝わってくる。日本列島に米づくりが広まると、土地の良し悪しや米の収穫量の差などによって貧富の差が生まれる。ムラには、首長と農民という身分の差も生まれ、土地や収穫物をめぐってムラとムラの争い（戦争）もあった。

②縄文時代後期になると気候が冷涼化し、内陸部では食料が減少し、人々は比較的温暖な臨海部に移動したと考えられている。やがて気候が回復してくると狭山丘陵の谷間で小規模な米づくりが始まった。

③所沢市では、縄文に比べてこの時代の遺跡数は極端に少なく、次の６か所。
〈・お伊勢山、日向（三ヶ島）、後内出（北野）、馬先・西内出、宮前、東の上の各遺跡〉

④谷間を臨む台地上にある**東の上遺跡**では、５２軒の住居跡が見つかっている〈 日向遺跡（三ヶ島）１５軒、後内出遺跡（北野）４軒 〉。

⑤東の上遺跡から３基、宮前遺跡から５基の首長の墓と思われる方形周溝墓が発見されガラス製小玉（ビーズ）や大型の壺などの副葬品が発見されている。

■古墳時代■（３世紀～７世紀後半）

①大和地方（奈良県）に天皇や豪族が中心となって、大和朝廷が成立した。土を盛り上げた墓（古墳）が九州から東北南部にかけて造られた時代で、古墳時代とよぶ。

②生活面では、弥生土器の流れをもつ赤っぽい色の土師器（はじき）と中国・朝鮮からもたらされた青灰色の須恵器（すえき）が使われるようになった。また、住居内では、縄文時代から続いた炉が５世紀ごろからカマドに替わる。

③埼玉県では、５世紀後半に埼玉（さきたま）古墳群（行田市）などの大型古墳がある。

④所沢市では、狭山丘陵周辺で住居跡が２００軒以上発見されている。その中で、海谷（かいや）・山下後（やましたうしろ）・膳棚東（ぜんだなひがし）・村中（むらなか）の遺跡では、７世紀頃の古墳（円墳）から勾玉（まがたま）・切子玉・ガラス製小玉・鉄製の直刀・弓先・耳環（じかん）須恵器などの副葬品が発見されている。これらの古墳は、この地域を支配していた豪族集団（有力な農民層）の長（おさ）の墓と考えられる。

⑤７世紀終わり頃には、台地斜面に横穴をくりぬいた横穴（おうけつ）墓墳も北秋津や滝の城で見つかっている。

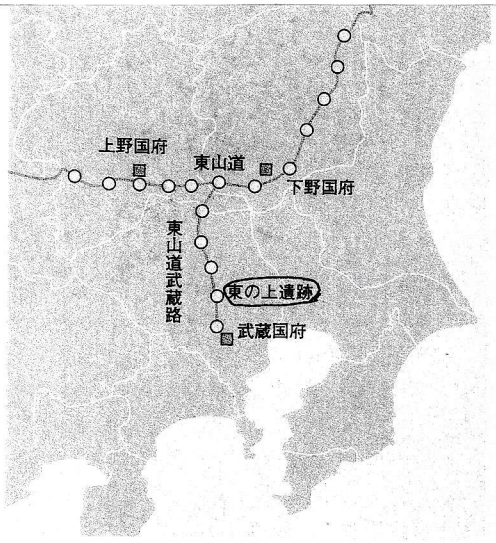
■ 奈良・平安時代 ■　（７世紀後半～１２世紀）

①大化の改新以後、大陸の進んだ政治や仏教が取り入れられ、天皇中心の中央集権国家が成立した。

②律令国家（奈良時代　７１０年）が成立した１３００年前、全国は６８の「国」とその下に「郡」が置かれた。

③中央（畿内～奈良・京都方面）の支配が全国におよび、東海道、東山道、北陸道、山陰道、南海道、西海道の７本の道路が建設され、中央の役人が地方に派遣されたり、地方から都や国府へ税や特産物が納められた。

④東山道（とうさんどう）」は、都から放射状に全国にのびる７街道の一つで、近江、信濃、上野（こうづけ）国府、下野（しもつけ）国府などを経て、陸奥国（むつのくに）を結んでいた。



東山道武蔵路の経路

●「**東山道武蔵路**」（とうさんどうむさしみち）は、本道から分かれて武蔵国府（府中市）と下野国府や上野国府を結ぶ支線。

・その**幅１２メートルの道路跡**が南陵中の校庭から発掘された→八国山東端を通り、国分寺、府中に通じていた。西国分寺駅先でも一部道路跡が発掘（一部保存）されている。（P3 写真）　　※東村山郷土資料館にも展示がある。

・当時、どのようにして幅１２メートルもの道を造ったのか、当時の中央集権国家としての影響力の強さを示すものである。おそらく、都（中央）からの命令で租・調・庸という税の中の「庸」として、人々がかり出されて、長い年月かけて造ったのではないかと思われる。

・「東山道武蔵道」には、所々に一定の間隔で「役所」のようなものがあったようで入間川左岸の「霞ヶ関遺跡」に、７世紀末から８世紀初頭に竪穴住居があった所に郡庁と推定される大型の掘立柱建物が建てられたことがわかった。そこが武蔵国入間郡の役所「郡家」（ぐうけ）があった場所であったといわれている。（2015.5.1 埼玉新聞記事）

・霞ヶ関遺跡に近い的場にある八幡前若宮遺跡では「駅長」と墨書された土器が出土霞ヶ関遺跡でも厨房を意味する「入厨」（いりくりや）と墨書された土器がみつかっている

●「**東の上遺跡**」は、「東山道武蔵道」周辺で発見された遺跡。

・旧石器時代から中世にかけての遺跡で、奈良・平安期のものが群をぬいて多い。

・発掘された　土器などの一部は吾妻公民館にも展示されており、多くの土器などは、小手指にある埋蔵文化財センターに保管されている。

・「東の上遺跡」からは、一般集落では出土しない具注歴（P3 写真）をはじめ、馬具、馬の歯、墨書土器などが発見され、約１６キロメートル間隔で置かれた役所［駅屋（うまや）］があったのではないかと考えられている。その決定的な遺物は発見されていない。

● 「悲田処」 とは

①地方から国府、さらには都まで、何日もかけて地租といわれる税を運ばなければならず、途中で病気になる人、死亡する人も少なくなかった。「悲田処」は、街道沿いにあったそうした飢えや病に難儀する人々を救った場所と考えられている。

②９世紀前半に、武蔵国司らの中央政府への請願によって多摩・入間両郡の境に置かれ１０世紀前半まで存続していたといわれる。

③その位置は特　定されていないが、「続日本後紀」という本には、『武蔵国はたいへん遠く、そのうえ荒れた広い土地であるから、旅をする人は食物がなくなって飢えたり、病気にかかって苦しむことが多い。そこで、多摩郡と入間郡との境に、悲田処を５棟建てた』と書かれている。

◆王禅山・佛眼寺（真言宗）（「久米の歴史」P7）

・延暦２１年（８０２）創建と言われ、市内でも古い寺の一つ

・文永１０年（１２７３）久米平塚家の祖と言われる平信能や能行の板碑がある。

◆鳩峰八幡神社（「久米の歴史」P10）

・醍醐天皇延喜２１年（９２１）山城国（京都府）の男山に鎮座する石清水八幡宮より分祀を受け、祀ったといわれる。

・貞永元年（１２３２）に社殿を修復したという記録がある。

■鎌倉時代■

■村山党といわれる武士団

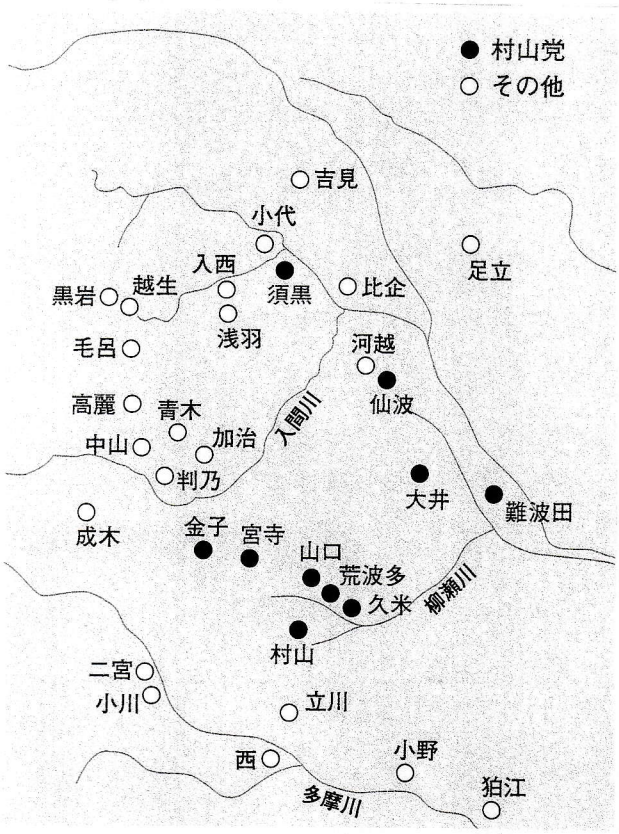
①平安時代には、中央の貴族や寺社は経済的基盤としてその地域の田畑を荘園として所有していた。地方の豪族は、付近の未開発地を積極的に開墾し、中央の有力者に寄進して、その土地の役人に任命され、事実上、自分の私有地とした。このような豪族は　領地の自衛のため武装し、やがて武士団に成長していった。

②村山党は、狭山丘陵地域で活躍していた武士団の一つであり、その本拠地は、現在の武蔵村山市・瑞穂町あたりといわれているが、確証はない。

③１１世紀末から１２世紀中頃の源氏の内紛という関東の不安定な政治状況の中で、村山党は、地縁や血縁関係などをたよりに一つの党（武士団）をつくり団結した

④村山党には、金子氏、難波田氏、宮寺氏、山口氏、久米氏、荒波田氏などがあった。入間市宮寺の西勝院には、宮寺氏の館といわれる遺構があり、所沢市山口には、山口氏の山口城遺構がある。

⑤所沢市北秋津の大堀山は、久米氏の館（東西約１００ｍ、南北約８０ｍ）ではないかといわれている。



●「山口城址」（周辺の写真（山口の「サンキ」横）を提示、説明する）

・北に椿峰の丘陵があり、南は柳瀬川と町谷の湿地に囲まれた要害の地

・東西約４００m、南北２００mと推定されるが、石垣はなく、土塁の上に木や竹の柵を造り、幅が広くて深い堀を巡らせて侵入者を防いでいた

・現在でも周辺地は、「堀之内」「城上」といった地名が残されている

■鎌倉幕府と村山党■

①１１８０年伊豆で、源頼朝は平氏打倒のため挙兵した。この挙兵当初、村山党を含め武蔵武士の多くは、平氏に従って頼朝に敵対した。村山、金子一族は、秩父平氏の流れをくむ畠山、河越、江戸氏らとともに、頼朝方の三浦氏と闘っている。

②しかし、東国の武士は次第に頼朝になびいていった。頼朝は、味方した武士に新しく領地を与え（御恩）、代わりに武力の提供を受ける（奉公）ことで、彼らを「御家人」として編成した。

③頼朝の死去後に台頭したのが北条氏であった。比企氏、畠山氏など代表的な武蔵武士や相模武士の和田氏、三浦氏などが将軍の外戚であった北条氏に敗れ、失脚。

④１２２１（承久３）年、北条氏の勢力拡大に危機感をもった後鳥羽上皇は、諸国に北条氏追討の院宣を発し兵を集めた。承久の乱とよばれるこの戦乱は、幕府側の反撃によってつぶされ、上皇は隠岐に配流された。『承久軍物語』には、この承久の乱で、金子氏、山口氏や久米氏などが幕府側の御家人として奮闘した様子が書かれている。

●鎌倉街道

①「鎌倉街道」とは、鎌倉時代以降、都市鎌倉と各地を結ぶ中世の道の総称である。大きくは、**上道**（かみつみち）・**中道**（なかつみち）・**下道**（しもつみち）とよばれた主要な道があった。

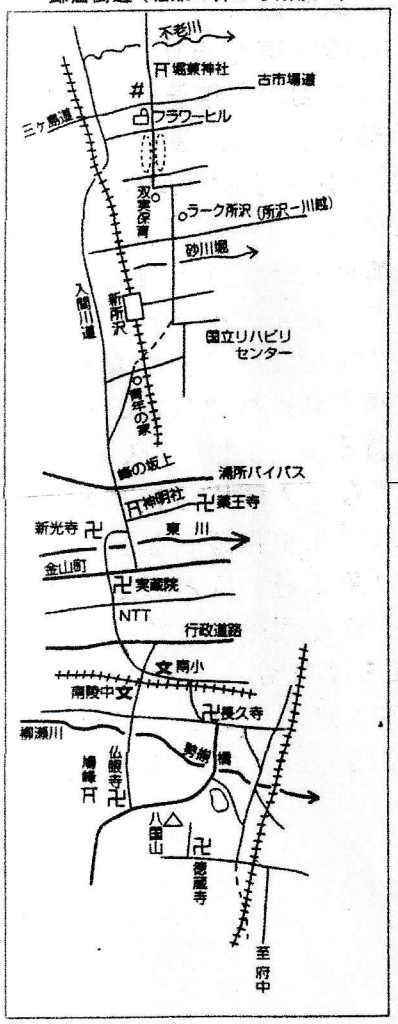
②上道は、武蔵道ともよばれ、鎌倉から武蔵府中、久米川この地域を通り、笛吹峠、児玉を通って、上野（こうづけ）国から信濃国に向かう経路（上野線）と比企郡で分岐し、高坂から太田を経て、下野（しもつけ）国・足利訪問に向かう道（下野線）もある。

③特に、下野線は、利根川を中流域で渡河できるので鎌倉時代から１５世紀半ばまで　関東の大動脈であったようである。これらの道を利用して年貢や各地の生産物が運搬され、軍勢が駆け抜け、商人や宗教者などの旅人の往来もあった。

④所沢を通るルートは、「久米の歴史」P4 地図にあるような「入間川道」とよばれた本道のほか、「堀兼道」、「小手指道」などの枝道もあった。道幅は「東山道」ほどの広さはなく、馬と人が行き来できる程度の道であった。

⑤その後も鎌倉街道上道は、上洛や様々な反乱・合戦で軍勢を進める道として利用されてきた。しか

鎌倉街道（堀兼の井から所沢へ）



し、１５世紀半ばの享徳の乱を境に、関東の政治拠点が変化し、鎌倉街道上道の重要性は低下していった。

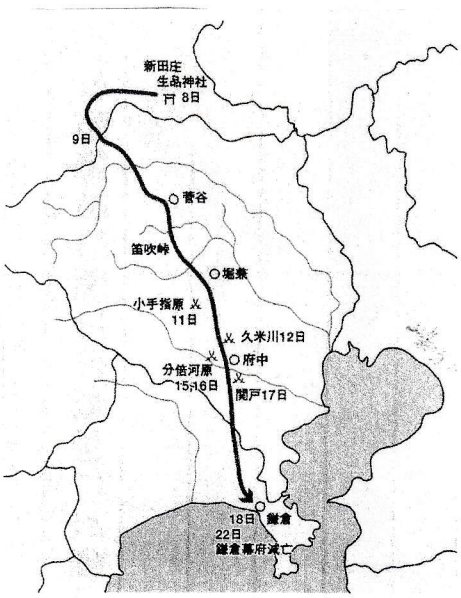
◆**長久寺**（時宗）（「久米の歴史」P10）

・鎌倉時代末期の元弘元年（1331）玖阿弥陀仏の開山とされ、所沢で唯一の時宗のお寺である。
※時宗は、一遍上人の開いた念仏宗

・藤沢市の遊行寺の末寺

■新田義貞の鎌倉（北条氏）攻め

①１３３３(元弘３年)年５月８日、新田義貞は生品神社で蜂起し、「東山道」を西進し、上野国（栃木県）八幡庄から鎌倉街道上道を利用して、武蔵国に進撃した。「太平記」によれば、新田勢は５月１１日に小手指ヶ原で合戦をし、１２日は久米川で戦い、１５日から１６日は分倍河原・関戸の合戦で勝利し、藤沢を経て（現地に一部鎌倉街道が残っている）鎌倉に向かったと記されている。



②久米八幡神社の「**兜掛け松**」（P5 写真）は、勝利祈願した場所であり、将軍塚（P5 写真）は久米川の合戦の勝利の記念碑である。また、「**勢揃橋**」（P33 写真）は新田軍が勢揃いして通過した橋という言い伝えのあるところである。

③新田軍は、５月１５日の戦いで（分倍河原）、飽間(あきま)斉藤三郎盛貞と同孫七行家が戦死し、１８日の村岡の戦いで、飽間三郎宗長が討ち死したが、この三人を供養した<u>板碑(青石塔婆)（写真）が、東村山徳蔵寺</u>（臨済宗）（写真）<u>に保存</u>されていて、国の重要文化　財になっている。
※板碑は、本来供養を目的として建立された塔婆のひとつで、中世には全国的に建立。関東では、秩父で産出する青石（緑泥片岩）が用いられ、青石塔婆ともよばれる。

④この鎌倉攻めには、**村山党を含む武蔵７党**が、新田方として分倍河原の戦いに参加した事が『太平記』に記されている。

⑤その後、大部分の関東の武士は、足利尊氏方についた。

⑥南北朝の動乱期の中で、村山党の系譜をひく諸氏の動向はわからなくなった。

●**将軍塚**（P5 写真）

・狭山丘陵東端の「八国山」（峰の上から８つの国が見渡せた）にある塚

・新田義貞の鎌倉攻めの「久米川の戦い」で、ここから指揮をとったといわれている

■室町時代■

①足利尊氏が新田義貞や楠木正成を破り、京都に室町幕府を開く（１３３６年）

②足利尊氏は、関東を納めるために次男の基氏(もとうじ)をおくり、関東(鎌倉)公方にした

③この関東公方を助けたのが執事（のちの関東管領）の上杉氏

④上杉氏は、管領として鎌倉にいたので、武蔵や上野（こうづけ）や越後は家老たちを守護代にして任せた

⑤上杉氏の守護代の一人に**大石氏**がいて、今の所沢のどこかに屋敷を構えていた

⑥大石氏の守護代は、信重、憲重、憲儀の三代で終わるが、その後も子孫は所沢・多摩地域で勢力をもつ

⑦１５４６（天文１５）年の川越夜戦で、上杉氏が小田原北条氏に敗れ、北条氏が南武蔵に進出した。その勢いに屈して、当時、滝山城（八王子市）を支配していた大石道俊は、支配地域を北条氏に譲り渡した。所沢の在地の山口氏もこの頃北条氏の支配下になった。

⑧所沢市大字城にある「滝の城」（本郷城）は、大石氏が築城し、川越夜戦後、小田原北条氏の一族である北条氏照の持ち城になったと考えられている

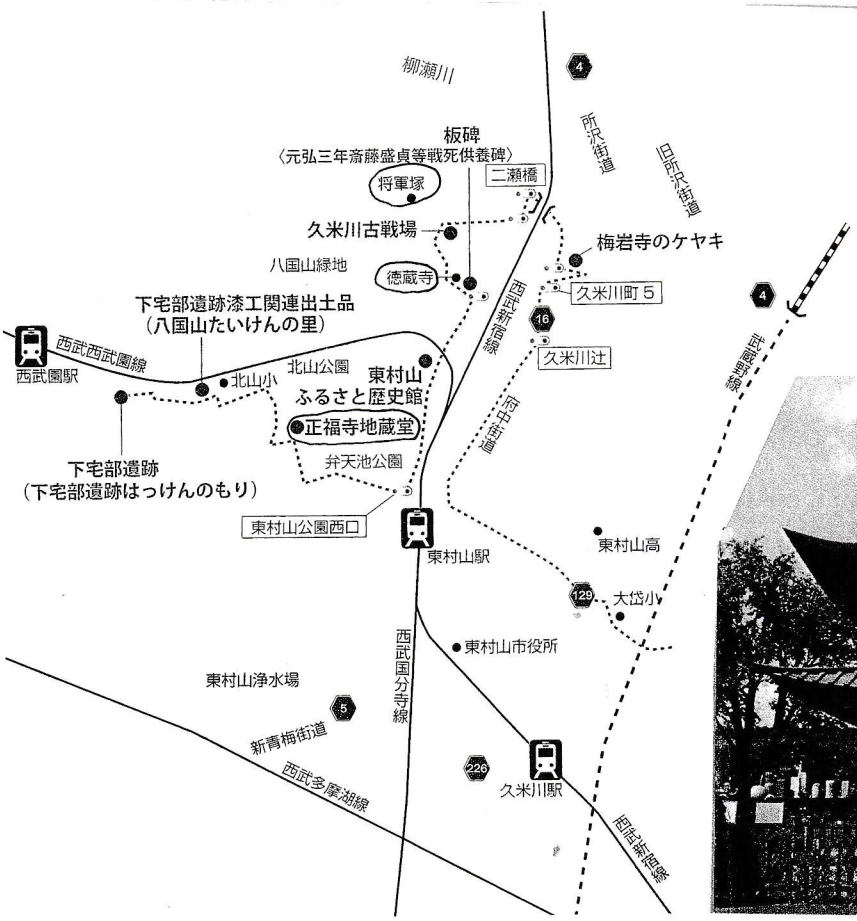
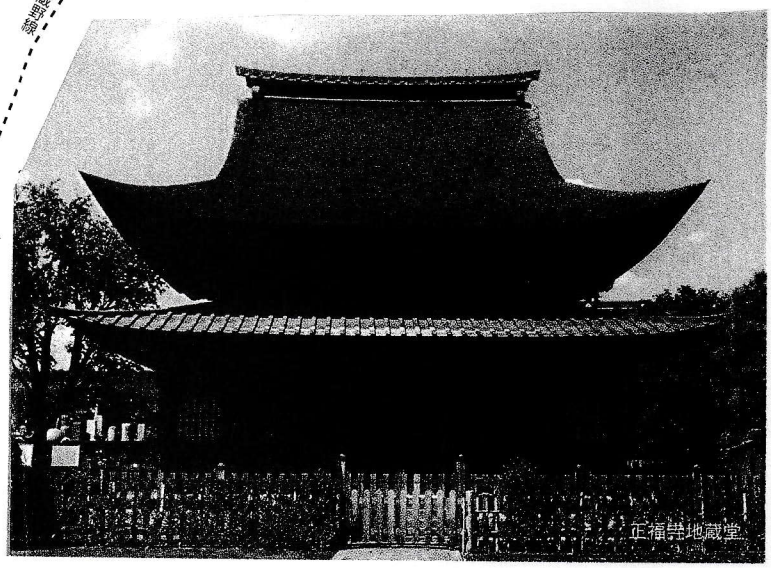
●**永源寺**（曹洞宗（「久米の歴史」P10）

・１４１９（応永２６）年創建の永源寺は、大石信重が開基といわれる。

・墓地裏手の高台にある**大石信重の墓**は、所沢市指定文化財

・江戸時代に徳川家康から寺領３０石と境内１万坪の土地を賜り、３年に１度登城した時は、住職が駕籠に乗り寺武士３０人が付き添ったといわれる。

■【参考】

※**正福寺**（東村山市野口町４丁目６番地　臨済宗・建長寺派）は、１２７８年（弘安元年）に執権北条時宗によって開かれたといわれる。１４０７年建立とされている**地蔵堂**は、鎌倉の円覚寺舎利殿とともに禅宗様式の代表的建造物で**国宝**に指定。堂内には、江戸時代の地蔵信仰による多くの小地蔵尊像が奉納されている。

※正福寺地蔵堂の写真提示